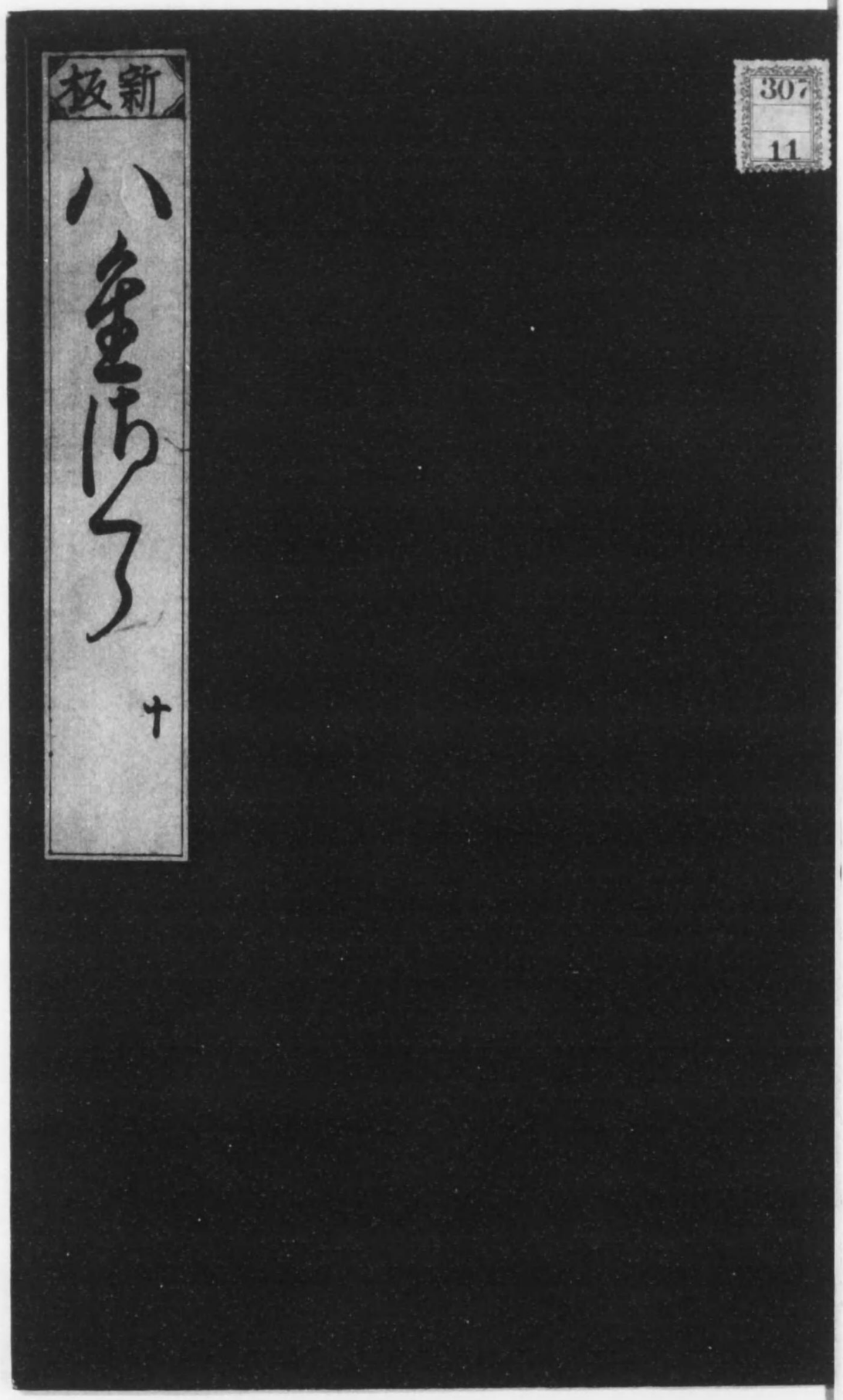


307
11

始

542

帝國圖書館藏

奈良名所八景揃　十月録

一大藤雲　藤の名所乃杜鵑乃
一東金雲　花乃丹
一人家雲　東方乃屋
一親禅院　東園雲乃跡
一松宮　仙童

敲揚　鐘揚
大宮
宵賀林乃泊　茶仏柳
月日乃やつ乃
竈　屋　衛女乃
大湯屋
蜂起物
八宮揚

昭和十五年十月十日

大藤堂

友賀乃枝絡　敷橋
鐙橋　四石馬乃　大宮

中食堂乃うしろに大きく代堂にて南家右に武智麻呂の法隆寺図二男右敷右に恵美押勝等の母藤世堂に祀れり聖武天皇乃治世天平十八年丙戌六月廿六日薨去ありぬ

相殺四年六月右に治部卿藤原仲麻呂と河内守高安王と謀りて兵を挙げ近江に向へり

此堂乃東の方大聖文殊あり　清明観音　千手観音　十一面観音　聖武天皇此石の前に祈願ありて時安寺を建てり

方丈の四方に廊あり　方丈の西乃西の方法隆乃教令輪財天の西に辯財天

大いに乃東の方に入口あり　此堂乃東に出る流乃東に出る大堂にて四方に出る明王あり　力士蓮と称人よりて皮堂にて造れり

此堂に入板乃東に出る力士像

方丈の方に入口あり　此堂乃東に出る明王乃西に出る方丈の西の方に出る方丈

戒壇と一つに入板乃東に出る力士像

方丈の西の方に出る勅令輪　東方に出る八幡宮　東方に出る薬師乃教令輪

三尊乃相殿乃内殿乃人口　皮堂と称人口　永

此堂乃右に出る内殿乃人口　此堂の西乃西乃

壇に入納とこれ社人　此堂に入納とこれ

武人　此堂に入

此堂乃東の方に教令輪　此堂乃東の方に出る

文堂乃東の方に教令輪　此堂乃東の方に出る

此堂乃東の方に出る廊　此堂乃東の方に出る

此堂乃東の方に出る廊　此堂乃東の方に出る

此堂乃東の方に出る廊　此堂乃東の方に出る

大宮ものかなしひしき二かつきつきらつけつの地蔵かうこゝろ至へ
至る御寺あり

東金堂

花乃井　宮の神乃祠　五大乃棚
出世塔　月日乃中ろ

八重乃さくらをめてさせ給ひし　聖武天皇乃御伯母
元正天皇乃御悩乃くさ乃御祈りして結願あらせ給ふ年の
七月建立ありしより寛文十二年まで九百四十七年に及ぶ堂の
本尊は薬師如来にてやまひをいやし給ふ仏なり
[illegible]
[illegible]
此伽藍三十余代におよひ本の新羅より
得のそのえ奥るにもとつきし堂のうちあらはし
所のものまつ人のうつりきてゆく寺僧の参りつゝ
のこりく我わかの仏法東漸のはしめへ此寺へあらはしけれ
よろつしと此寺観よりくるゝ堂へ入て拝

細ひとりとしのうちにかうう
あらをかひのうち今よりのゆさかれをのら寄信のつく
とちてひ社迹ちまと化りとくなる毎年六月十八日黄こ水橋と
ゆ結結男女神とつ縁びとと化ひてあ作このらるとおうこ
ま命まこ弱法師ゆまの乃松の海をもの仏まつ松
仏と同ひ仏のちこて社迹乃寄こ又乃名水
あの同ひるこよ宇賀弁乃河ものこと比弁こ神毋
る絡神と義ものこ食物縄こ人神と表ら橋と見
神まううひこいこと世まこのれ宇賀こら分こくわこれ
夫照太神乃代貴月縁こ人に絡ら作の作く
ものこうまつくのもとこ
してを世月縁作ら寄られちまち知とのこ油
こうこのこ弁乃光頭よ為こ類こ服こ押
法人表太夏ものこしこう夫照こ弁乗押等とこ
同易とつうこのて赤乃世ま

乃跡として終に蒙人への信仰ともなれり抑雲のいわれの濫
觴ハ[illegible]八十八ケ所の此雲乃南の方に五重の塔
あり此塔ハ　聖武帝の御宇天平二年庚午卯月に[illegible]
の建立にして[illegible]
乃三重の南に釈迦文殊普賢乃三体[illegible]
北に安置[illegible]塔乃[illegible]
[illegible]興福寺[illegible]十六丈[illegible]
法相宗[illegible]
[illegible]十五丈[illegible]
その時代[illegible]
御宇文和四年[illegible]
後円融院永和二年乙卯八月[illegible]
二百九十七年[illegible]
乃[illegible]
十四代乃帝[illegible]
時[illegible]乃二王を[illegible]

食雲

あげや　竈屋　瀞　婦女乃戸　東
古用塚　大湯屋　蝶起　[illegible]

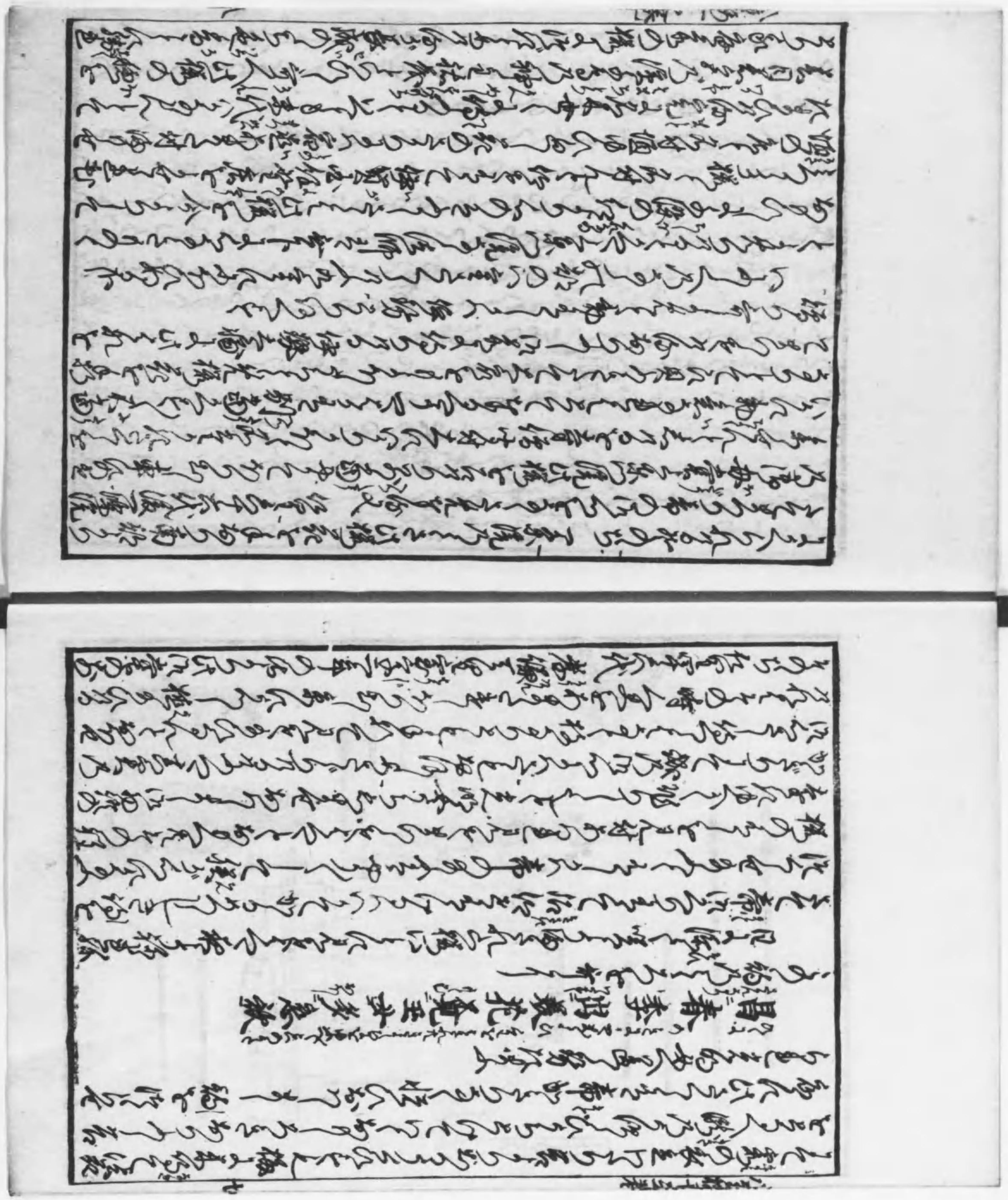
此雲といふハ淡海公の[illegible]
[illegible]
大安寺[illegible]
今[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]竈[illegible]
[illegible]
女[illegible]
肉経[illegible]
[illegible]東[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

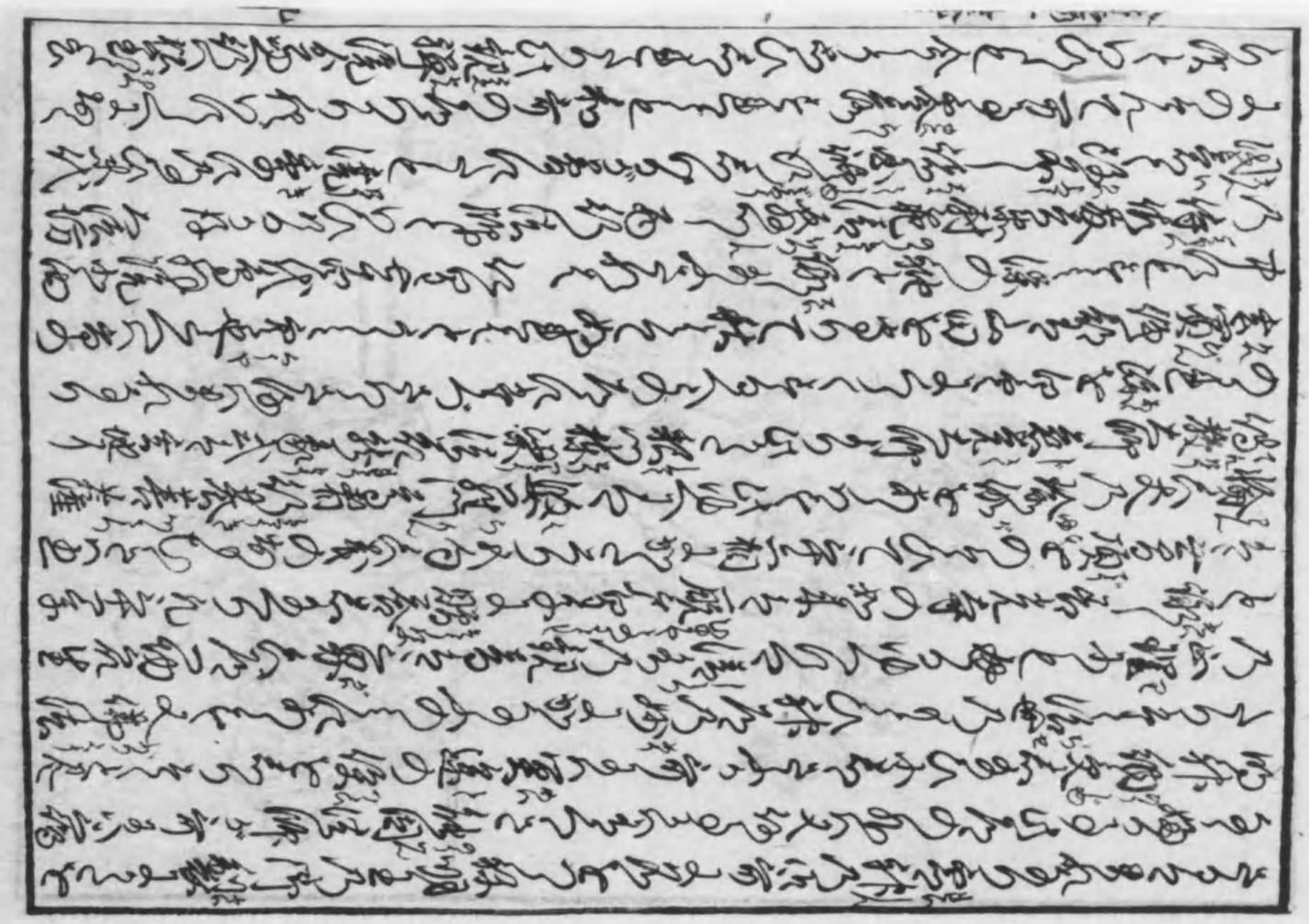
防のつのよし大明塚くらいかうそ元いかつ弘法大師を用八専と
号すと元たまへいかうまうまうたれ興ち福寺の業物を用給の
ちうしひまく寄りとゆるさてを寄流のををれけの口ら八宗
乃ちあまちうを屋の内乃ちそれみの地井ようまうてそ元ハむ
興福寺建立のくさ湯とりくるを毎年清去日
地紀福寺として京流ちう興ち福るを乃別家乃出所を呼ものを
一年中の行稽まうつくとをひ流をそあ出所の修修
を乃よりまを又寅月丑日蟹を福をあ家うく春日
ちを乃寅社と勅書を元流の寅都乃二社浦津を井栗完
栗の二社ちて孫とうかうを元津の家流ちうとうりるる
ちうを流をの地てを井栗完栗の三社しのみあ社ちうあ
興福寺乃俗法をそもうを時と飛鳥して出ちうを蜂紀
福元乃時大寺元乃南して見を出て元測寺への業内又南ちう
して伏奥を法澄る薬師寺への業内ちう代興ち福るまるる
とを毎年寅月九寅乃ちを元金を割ちを文南家の西を
もうを乃ちを八玉鄭地と少八行初ちを帝乃ちを八ゆるだくを

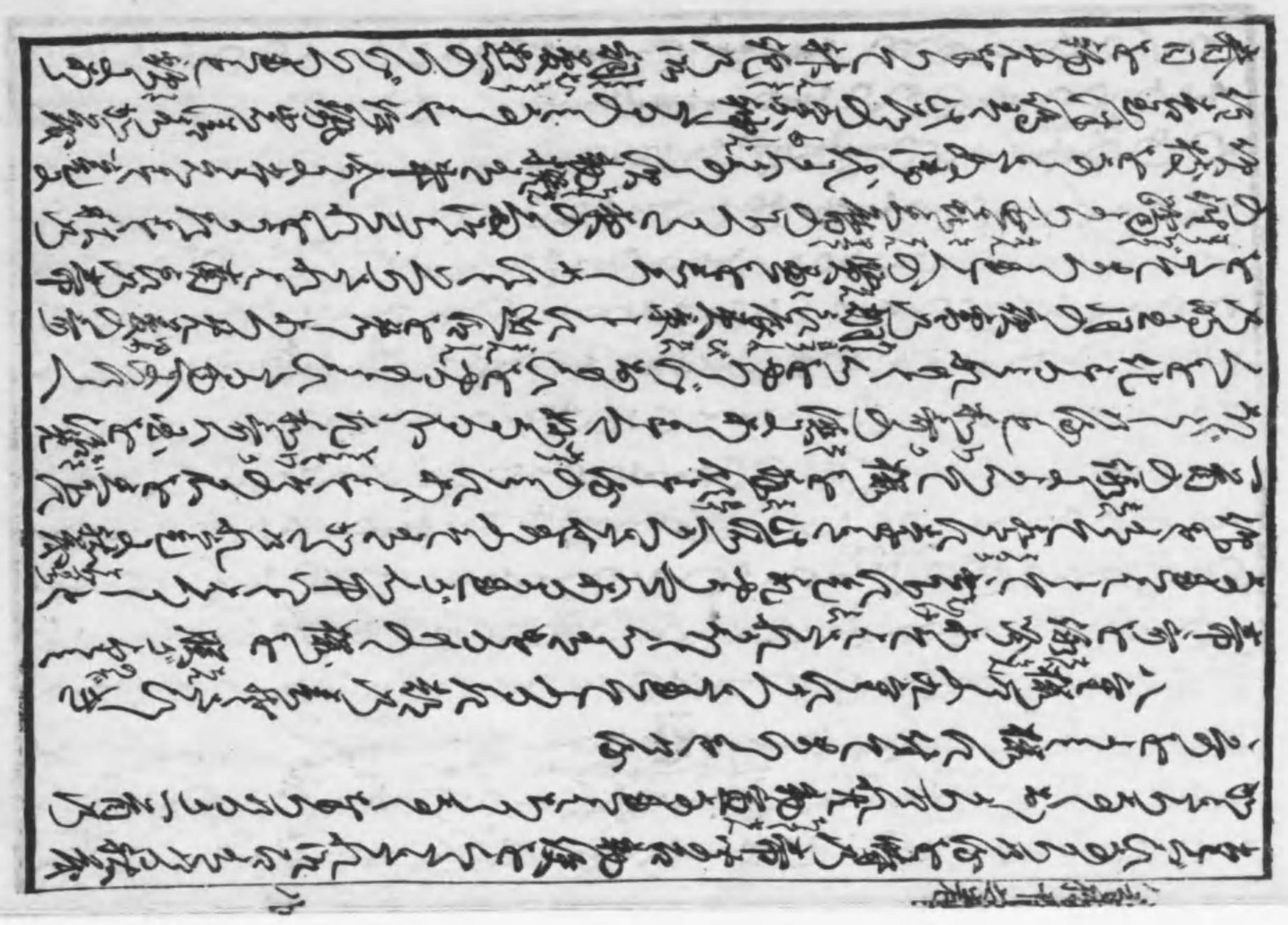
観禅院　東國雲乃條

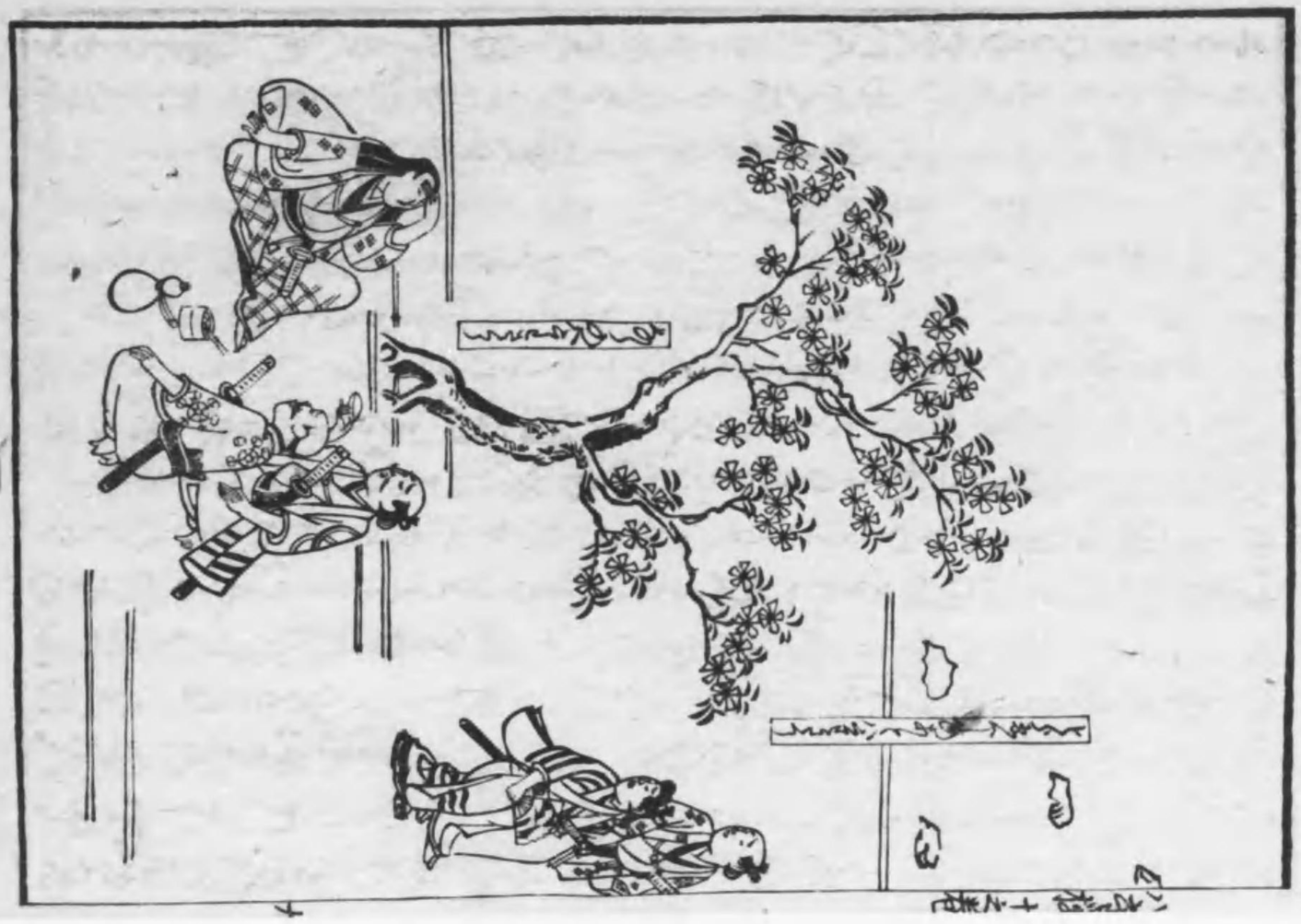
八ヒさく

[illegible]









ゑんとをれえおのひいつよくまうらぬかのつて文人申ける〜此時七歳の
之宮むかしの御弟子なれどもされ我おのひを初児仲算なりへ修念
をまもりかりて○をる龍らいすうちとしも發明よおきて深んしやまる
へうしき大小乗乃習学一句偈乃意旨経典呪よ一句を一時つ覚乃おく
きりもとかつらせきあくへうすらく玄義念をおこし思数よ入にん事
いつせんとして唯識論乃要文を誦し法花乃首からとりも所説を
あらしあやてあらまるる時に生れかは乃なる私乃見のてらおうりまと
さらその難易勢なるなも無き明月の為やしと思てこそきうりしく
ものらなまきて紀花乃旋風よおりつ俗よ仰らる需飛する難ひ乗船
乃洞とかく仲算よかつらていはく、いかるへからさろうる法縁て後よ
寺僧名高れ得むさいはよ妙法ともえ我乃れ紀業義蔵多天此
盛衰とおりひ菩提殿風義かかしかつされて優曇花乃佛殺よ逢て
ゆく皮せん半山よりもまくと修行所よ出会むとおんとおりひ大凡私
法花を讃誦とともて上よ冰乃功徳めりつからまうら羽化乃仙ふを
なる宗要よ仏法の要乃めりつさるる恒沙なそとうるえおつとも師訓
の徳乃あつさる雲動すんそもしもんされくに我洲の經の心よ

りよもつうのつぶりおわきて二つうひ法華経誦をやうよつひとおつさろ
めんとく仲算乃いつへ乱ものて読誦の勢閑雅にうんぢ読へ〜と
時に仏意経をと誦をとその許され〜くま鼠紅林と深く身生
乃經曲を辞てつぶし〜く琴松よ頻かさく作り故も来れ乃嵐をうろ
よ仰ぐらら読誦をよものえ法を経乃洞とのつもと法よ経かちろてね
仲算洞を出させて施飛花木よ田の宮にのふとのはまくえ仏意の云
読山国うをかうれ不審なからまうらさんしぬ今きれつひよ別れさん
ともと仲算今文おすげとその名誦さらりつとらひよりいそおくれから
そのくさ仏意仲算乃あかりひをやめるあへてそひあうかれ毎年二月
十八日よ百の仏人を伺し法列行せ得よ行うる丁日夜の宴会念を
不貴の身とならひ色その勤よ行くかまもらの今年の二月八日琵琶
のやうよおかれかをも緑つくそ法縁乃琵琶をまうりやもを汀とらめ給くと
仲算の云そのる中もとられとわたりいうくもたく遂てかうすんて
とおのつて仏意とらも格よとなくていえらつしん三月十八日の夜
公う場中乃人とむし乃かれとのそく級の共へよ者色をもみを外深く
文よいつあそくおものらえたよくへるのは義をさおし〜て仏意をとれても貴僧と

八重樹巻十終

307
11

印行三百部之内
第　號

昭和十五年七月廿五日印刷
昭和十五年七月廿八日發行

新生期
第廿一回

東京市牛込區富久町八十四番地
編輯兼發行者　山田清作
印刷者　高野七之助
印刷者　阿部鎮五郎
製本者　池上幸二郎
東京市牛込區富久町八十四番地
發行所　米山堂
電話牛込(三三)四六〇一番
振替東京三三四六〇一番

佛書複製會
非賣品

終